気掛りな未来

――童謡から――

武鹿　悦子

童謡は、さまざまに変遷してきました。

明治以前の子どもは、子どもたちが集団的に生みだし、口伝えで各地に定着した〈わらべうた〉を、遊びのなかで歌っていました。それは、子どもの躰と心に溢れる野放図なものを発散させる、子どもたち自身の歌たっだのです。

この〈わらべうた〉の日本旋律を斥け、西洋音階の〈唱歌〉を子どもたちの歌としたのは、維新後、学制を公布し、西欧優先の変革を進める途上の明治政府で、子どもが子どもとして意識され始めた現れでした。しかし、子どもたちにとっては、教室で習う〈唱歌〉は、学校の歌でしかありませんでした。

この〈唱歌〉への批判から、一九一八年七月、童謡・童話雑誌「赤い鳥」が、鈴木三重吉によって創刊され、〈童謡〉は、創刊と共に誕生したのです。

「赤い鳥」の童謡運動には、多くの詩人、作曲家が協力しました。運動の中心となった北原白秋、西條八十、野口雨情（〈金の船〉）は、のちに〈三大童謡詩人〉と呼ばれました。

八十の「かなりや」（成田為三曲）、雨情の「しゃぼん玉」（中山晋平曲）、白秋の「この道」（山田耕筰曲）など、日本の代表的な童謡を、わずか数年の間にぞくぞくと生み出したのです。

「赤い鳥」の成功は、良心的児童雑誌の発刊を促し、同人誌の発行、投稿家の活動、子どもによる児童詩の広がりをもたらし、大正デモクラシーと呼ばれる日本初の民主主義の風潮のなかで、大きなうねりとなりました。そして、「赤い鳥」の自由を尊ぶ精神は、後の童謡に指針として受け継がれました。

豊饒な大正童謡を引き継いで昭和の童謡は、ラジオ、レコードという新しい時代のマス・メディアの進出にともなう強大な普及力と、商業主義に影響されて著しく姿を変えていきました。

レコード会社で企画、制作される童謡は〈レコード童謡〉と呼ばれました。娯楽性の高いレコード童謡は、それを歌う少女歌手の人気と共に歓迎され、ラジオの伝播力によって、全国的に童謡を定着させました。「かもめの水兵さん」、「仲よし小道」、「みかんの花咲く丘」、「子鹿のバンビ」など、太平洋戦争をはさんで前後ほぼ三十年間、レコード童